

げんてん ふれあい 福井

2016 WINTER 第50号



特別寄稿「若狭路の祭りや民俗芸能のこれから」

「げんてんふれあい福井」～第50号までの歩み～

ふるさと福井「豊臣秀吉の近臣・敦賀城主
人物シリーズ」

大谷 吉継(二)

休刊のごあいさつ

当財団の広報誌「げんぶれあい福井」は、今50号をもって休刊させていただくことになりました。

財団の活動をお知らせするとともに県内の文化活動等を紹介し、県民の皆さんとの絆を深めていく目的で、財団設立の翌年、平成10年5月に創刊しました。年3回、その後平成24年度からは年2回発行し、県内の公共機関、文化団体等に配布してきました。

本県の無形民俗文化財を取り上げた表紙は、多くの県民のみなさまに親しまれ、また、古くから伝わる祭り、神事等を解説した「ふくいの伝統行事シリーズ」や福井県ゆかりの歴史上の人物等を紹介した読み物など、ご好評をいただいた記事も多かつたと自負しております。原稿執筆などご協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げます。

東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所での事故を契機に、財団の運営は非常に厳しいものがあり、事業を大幅に縮小して対応してまいりましたが、今回、休刊することとしました。地域の皆様との大きな架け橋となってきた本誌を休刊することは真に断腸の思いであります。ご理解くださいますようお願い申し上げます。

今後は、財団のホームページ (<http://www.genden.or.jp>)などを通して、県民のみなさまとの絆を深めてまいりたいと考えております。これまでと変わらぬご支援、ご指導をいただきますようお願い申し上げます。

長きにわたりご愛読いただきありがとうございました。

公益財団法人
げんぶれあい福井財団

理事長 前川 芳士

目次 50

●休刊のごあいさつ	2
●特別寄稿	
「若狭路の祭りや民俗芸能のこれから」	3
●「げんぶれあい福井」	
～第50号までの歩み～	4～5
●ふるさと福井人物シリーズ	
「豊臣秀吉の近臣・敦賀城主	
大谷吉継（二）	6～7
●ふくいの伝統行事シリーズ	
「国津神社の神事」	8
●若狭の食彩（五）	
「若狭の行事とシトギ（粢）」	9
●敦賀市立博物館	
誌上ギャラリー／44	10
●情報ファイル	11

表紙の説明

以前、周辺の山麓や田畠から縄文時代の丸木舟や弥生時代の銅鐸が出土した、若狭町向笠（旧三方町）は、三方湖にそそぐ高瀬川上流の、のどかな農村。集落の中央部に鎮座する国津神社は忍穂耳命と瓊瓊杵尊を祀る、正五位の旧村社（享保五年の人神名帳写）。毎年四月三日には春季例大祭が行われ、華やかで厳かな村立ちの行列のあと、境内で王の舞、田植えの舞、田楽が奥ゆかしく奉納されます。



財団シンボルマーク

公益財団法人「げんぶれあい福井財団」は、福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的に、県民のみなさんとの絆を大切にした広報誌を目指します。



若狭路の祭りや 民俗芸能のこれから

福井県立若狭歴史博物館 副館長 垣東敏博

平成26年夏にリニューアルした当館の常設展示「若狭の祭りと芸能」ゾーン（写真）では、若狭路の祭りや年中行事、民俗芸能を紹介している。いまなおこうした多彩な民俗文化が伝承され続けていることに驚嘆される観覧者が多くみられる。

しかし内実は、少子化や、進学・就職による若者の流出等による担い手不足の問題が年々深刻化してきており、実際に伝承の危機に直面しているものが多く、やむなく中止にいたつたものも増えてきている。

大太鼓・神楽・獅子・山車など多彩で華やかな民俗芸能が繰り広げられ、若狭路最大の秋祭りと称される小浜放生祭も例外ではない。昭和50年代頃か



若狭歴史博物館常設展示「若狭の祭りと芸能」ゾーン

ら、本来男の子だけに限っていたのが、女の子も太鼓を打つたり山車に乗れたり込んだりできるようになり、平成に入つてからは、地区内だけでは足りず、地区外に住む出身者や外孫などにも祭りに出てもらわないと維持できなくなっている地区が多くなっている。平成27年の大宮区の大太鼓の場合は、棒振りや太鼓・鉦・笛を担当する青壮年34名のうち17名が区外在住者（実は私もそのうちの1名である）、子供太鼓を打つ子供も22名のうち11名が区外の子というように、半数が区外からの応援であったが、いずれ区外からの参加者のほうが多くなるかもしれない。

地域社会の成員によつて維持伝承されるべき祭りや民俗芸能の本来のあり方からすれば、現在の状況は、やや逸脱してきたといえるかもしれない。だが、伝統を頑なに守ろうとして、民俗芸能が伝承できなくなってしまったらどうであろうか。民俗芸能の稽古の場では、大人が子供に教え、先輩が後輩を指導し、またその様子を年寄りが見守るというような、世代間の交流やふれあいがあり、そこにこそ本来の地域コミュニティの姿が現出しているといえるだろう。しかし、祭りや民俗芸能がなければ、隣近所に住んでいても、なかなか顔を合わす機会はなく、それでは地域社会は行政区分の末端としての意味しかもたない。

岩手県内の民俗芸能の復興支援のため奔走した追手門学院大学の橋本裕之教授はその著書『震災と芸能—地域再生の原動力』のなかで、「生活再建や地域再建ができるから民俗芸能なのでなく、生活再建や地域再建のために欠かせないアイテムこそが民俗芸能」だたと述べている。また、「釜石に住んでるから虎舞をやってるんじゃなくて、虎舞をやってるから釜石に住んでるんだ。だから虎舞がなくなってしまうんだ」という民俗芸能等の公演イベントを開催している。こうした若狭町伝統文化保存協会の取り組みは、担い手自身が伝統文化の価値や意味を再認識し、また、地域外の人々との交流によって生きがいであり喜びであることを紹介している。放生祭があるから狭い町屋暮らしだでも小浜の町から郊外に引っ越すこととはしない、祭りがあるから県外に就職するのはやめて小浜に就職した、という友人や知人のいる私にとってもおおいにうなづける言葉である。

地震と津波によって一気に何もかも失つてしまつた東北地方ほどではなくとも、少子高齢化や過疎化などによつて、若狭路における地域コミュニティもその多くが変容してきており、限界集落という崩壊の危機に瀕しているところもみられる。そうした中で、祭りや年中行事、民俗芸能を伝え残して行くことが、それぞれの地域社会にとってどういう意味があるのか、改めて問い合わせなければならない時代になつてきている。

若狭町伝統文化保存協会は、町内全集落の祭りや年中行事、民俗芸能などを網羅した「若狭町伝統文化実態調査報告 つたえつなぐ」を平成25年3月に刊行した。この報告書の特色は伝統文化の担い手である各集落の人々の手によって記録され、まとめられている点である。また、平成26年度には町内16集落に伝承されている戸祝い・キツネガリについて、県外の研究者も加えて調査し報告書を刊行している。伝統文化に関する講演会やシンポジウムも数多く開催し、年に一度は県外からも保存団体を招いて「伝統文化のつどい」という民俗芸能等の公演イベントを開催している。こうした若狭町伝統文化保存協会の取り組みは、担い手自身が伝統文化の価値や意味を再認識し、また、地域外の人々との交流によって生きがいであり喜びであることを紹介している。放生祭があるから狭い町屋暮らしだでも小浜の町から郊外に引っ越すこととはしない、祭りがあるから県外に就職するのはやめて小浜に就職した、という友人や知人のいる私にとってもおおいにうなづける言葉である。

先に紹介した橋本裕之教授は、王の舞研究の第一人者でもあり、30年以上保存継承のための課題の把握や解決のヒントを得る機会ともなっている。

美浜町の弥美神社の例大祭に通い続け、平成12年から平成21年までは弥美小学校で祭礼学習を担当した。平成27年11月29日、その授業を受けた卒業生らが集まり、橋本教授を進行役に「明日の例大祭を考える若者会議」が行われたが、地域の祭りや民俗芸能について学校で子供たちに伝えていくことも、将来の保存継承のために大切であることが確認されていた。

祭りや民俗芸能はもともと地域内で完結してきたものだが、これからは祭りや民俗芸能の当事者である担い手自身が、地域外の研究者や保存団体など、積極的にさまざまな人々と広く交流し、課題を共有したり、解決のための知恵や力を借りていくことが、将来への保存継承のために必要になつていくことと思われる。

ふれあい福井

第50号までの歩み

また、シリーズで福井県の民俗芸能等を詳しく解説、県指定の無形民俗文化財は、ほとんどのものを紹介することができました。

シリーズ「ふくいの伝統芸能・行事」

- ・越前万歳（創刊号）
- ・三宅六斎念仏（第2号）
- ・八坂神社の獅子舞（第5号）
- ・敦賀西町の綱引き（第6号）
- ・表兄の米（第7号）
- ・国山の神事（第8号）
- ・野坂だのせ祭り（第9号）
- ・じじぐれ祭り（第10号）
- ・オシッサマのお渡り（第11号）
- ・水海の田楽能舞（第12号）
- ・馬鹿ばやし（第13号）
- ・長畠日向神樂（第14号）
- ・睦月神事（第15号）
- ・大瀧・岡太神社の春祭り（第16号）
- ・小浜放生祭（第17号）
- ・加茂神社上宮の神事（第18号）
- ・椎村神社の祭り（第19号）
- ・若狭能倉座の神事能（第20号）
- ・みやあげ神事（第21号）
- ・糸崎の仮舞（第22号）
- ・八田獅子舞（第23号）
- ・栗田部の蓬莱祀（第24号）
- ・宇波西神社の神事芸能（第25号）
- ・明神ばやし（第26号）
- ・勝山・左義長（第27号）
- ・三国祭（第28号）
- ・大火勢（第29号）
- ・ばいもしょ（第30号）
- ・花山行事（第31号）
- ・赤崎獅子舞（第32号）
- ・柴の実入れ（第33号）

- ・相撲甚句（第35号）
- ・河原神社神事（第36号）
- ・沓見のお田植え祭り（第37号）
- ・海土坂の送り盆（第38号）
- ・日向の水中綱引き（第39号）
- ・したんじよう行事（第40号）
- ・大島のニンの杜（第41号）
- ・オイケモノ（第42号）
- ・椎村神社の祭り（第43号）
- ・敦賀市色浜の産小屋（第44号）
- ・高浜七年祭り（第45号）
- ・音海のお的射り（第46号）
- ・和久里の壬生狂言（第47号）
- ・じじぐれ祭り（第48号）
- ・池田追分け（第49号）
- ・国津神社の神事（第50号）
- ・大瀧のニンの杜（第41号）
- ・河原神社神事（第36号）
- ・沓見のお田植え祭り（第37号）
- ・海土坂の送り盆（第38号）
- ・日向の水中綱引き（第39号）
- ・したんじよう行事（第40号）
- ・大島のニンの杜（第41号）
- ・オイケモノ（第42号）
- ・椎村神社の祭り（第43号）
- ・敦賀市色浜の産小屋（第44号）
- ・高浜七年祭り（第45号）
- ・音海のお的射り（第46号）
- ・和久里の壬生狂言（第47号）
- ・じじぐれ祭り（第48号）
- ・池田追分け（第49号）
- ・国津神社の神事（第50号）
- ・大瀧のニンの杜（第41号）
- ・河原神社神事（第36号）
- ・沓見のお田植え祭り（第37号）
- ・海土坂の送り盆（第38号）
- ・日向の水中綱引き（第39号）
- ・したんじよう行事（第40号）
- ・大島のニンの杜（第41号）
- ・オイケモノ（第42号）
- ・椎村神社の祭り（第43号）
- ・敦賀市色浜の産小屋（第44号）
- ・高浜七年祭り（第45号）
- ・音海のお的射り（第46号）
- ・和久里の壬生狂言（第47号）
- ・じじぐれ祭り（第48号）
- ・池田追分け（第49号）
- ・国津神社の神事（第50号）

「げんでんふれあい福井」は、平成10年の創刊以来、第50号の節目を迎えるままでこれまでの歩みを振り返ります。

●平成10年5月 創刊



創刊号
宇波西神社の神事芸能

●平成16年11月 第20号

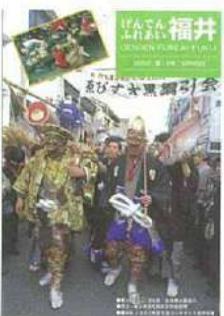
創刊20号記念座談会「21世紀「財團の進路を拓く」ために」を開催



第20号
若狭能倉座の神事能

●平成19年7月～20年3月 第28号～30号

財団設立10周年を記念し、「げんふれあい福井財団の役割と活動」を掲載



第12号
敦賀西町の綱引き

●平成20年3月 第30号

創刊30号記念座談会「福井の文化とふるさとづくり」を語る」を開催



第28号
三国祭

●平成28年1月 第50号

今号で休刊

福井県の民俗文化を紹介

表紙やシリーズで福井県の民俗文化を紹介してきました。本県は民俗文化の宝庫と言われており、有形、無形

の文化財が数多く残っています。中でも無形民俗文化財は地域の人々が古くから守り育ててきたものであり、信仰や風土と関わりの深い、本県が誇りとするもののひとつです。後継者不足や資金の問題など継承の難しさが言われておりますが、県民の皆さんがこれら

の文化を知り、関心をもつていただきことで、保存、継承に尽力されておられる方々の一助になればと願っています。

表紙では、県内の無形民俗文化財である莊厳な神事や勇壮な祭などを写真で紹介してきました。

（文／永江秀雄氏 第13～15号）

●シリーズ「福井の民俗文化」

刀根・氣比神社の秋祭り
(文／高早恵美氏 第36号)

（文／山岸晉氏 第37号）

（文／成田かおる氏 第38号）

敦賀市山 稲荷神社の初午祭り

（文／垣東敏博氏 第39号）

北川流域の子供御輿

（文／永江秀雄氏 第40号）

アッポツシャとアマメン

（文／竹腰学氏 第41号）

日引の八朔綱引き

（文／田中孝氏 第42号）

福井の雨乞い行事

（文／坂本育男氏 第43号）

敦賀・若狭の若連中寄進石燈籠を訪ねて

(文) 多仁照廣氏 第44号)

冠島と漁民信仰「雄島参り」
(文) 丸木雅広氏 第45号)

●若狭の食彩

- (文) 一矢典子氏 第46号～第50号)
- 正月と食 鯖(サバ)の食文化
- 麹の食文化
- 伝統行事の食と信仰
- 若狭の行事とシトギ(粢)

本県ゆかりの人物等を紹介

「福井の文学碑」、「ふるさと福井人物シリーズ」などで、福井県ゆかりの歴史上の人物等を紹介してきました。県内の著名な方々に執筆をお願いし、レベルの高い読物との評価を得てきました。本県は多くの傑出した人を輩出しており、その業績、人物像などを県民の皆さんにより深く知つていただき、ふるさとを愛し、誇りに思つる県民風土の醸成に少しでも貢献できればと思ひます。

●シリーズ「福井の文学碑」

三好達治(第10号)

山川登美子(第11号)

松尾芭蕉(第12号)

近松門左衛門(第13号)

高見順(第14号)

山本和夫(第15号)

橋本左内(第16号)

紫式部(第17号)

橋曜覽(第18号)

万葉歌碑(第19号)

哥川(第20号)

藤野巖九郎と魯迅(第21号)

日下部太郎とW.E.グリフィス(第22号)

道元禅師(第23号)

宇野重吉(第24号)

種田山頭火(第25号)

韓国船遭難救護の碑(第26号)

中野重治(第27号)

則武二雄(第28号)

今川節(第29号)

多田裕計(第30号)

芳賀天一(第31号)

高浜虚子(第32号)

橋本進吉(第33号)

雨田光平(第34号)

藤原定(第35号)

開高健(第36号)

尾崎放哉(第37号)

山本周五郎(第38号)

深田久弥(第39号)

伊藤柏翠(第41・42号)

松木庄左衛門

(文) 永江秀雄氏 第19・20号)

由利公正

(文) 三上一夫氏 第21～23号)

杉田玄白

(文) 永江秀雄氏 第24・25号)

松平春嶽

(文) 三上一夫氏 第26～28号)

妙空寺義門

(文) 永江秀雄氏 第29～30号)

橋本左内

(文) 三上一夫氏 第31～33号)

伴信友

(文) 山本昭夫氏 第34号)

石塚左玄

(文) 岩佐勢市氏 第35～42号)

酒井忠勝

(文) 中島辰男氏 第43～47号)

森田愛子

(文) 山岸世詩明氏 第48号)

大谷吉繼

(文) 外岡慎一郎氏 第49・50号)

●継体天皇の継体天皇

(文) 青木豊昭氏 第26号～28号)

●戦国大名「朝倉氏の歴史と文化」

(文) 佐野周一氏 第36号～38号)

●若狭の歴史と人物

(文) 杉本泰俊氏 第39号～42号)

●生誕百年に寄せて「白川文学学」と福井

(文) 守護武田氏と木下長嘯子

お初と三姉妹

酒井家と小浜藩

杉田玄白、雲浜と幾松

山田玄白、雲浜と幾松

伊藤柏翠(第41・42号)

山本周五郎(第38号)

深田久弥(第39号)

泉鏡花(第40号)

伊藤柏翠(第41・42号)

松木庄左衛門

(文) 永江秀雄氏 第19・20号)

由利公正

(文) 三上一夫氏 第21～23号)

杉田玄白

(文) 永江秀雄氏 第24・25号)

松平春嶽

(文) 三上一夫氏 第26～28号)

妙空寺義門

(文) 永江秀雄氏 第29～30号)

橋本左内

(文) 三上一夫氏 第31～33号)

伴信友

(文) 山本昭夫氏 第34号)

石塚左玄

(文) 岩佐勢市氏 第35～42号)

酒井忠勝

(文) 中島辰男氏 第43～47号)

森田愛子

●博物館等を訪問、紹介
福井県立恐竜博物館、福井市立橋

韓國船遭難救護の碑(第26号)
中野重治(第27号)
則武二雄(第28号)
今川節(第29号)
多田裕計(第30号)
芳賀天一(第31号)
高浜虚子(第32号)
橋本進吉(第33号)
雨田光平(第34号)
藤原定(第35号)
開高健(第36号)
尾崎放哉(第37号)
山本周五郎(第38号)
深田久弥(第39号)
伊藤柏翠(第41・42号)
泉鏡花(第40号)
伊藤柏翠(第41・42号)
松木庄左衛門

等を訪問し、展示・活動内容等を紹介してきました。(第4号～第40号)

敦賀市立博物館誌上ギャラリー

敦賀市立博物館が所蔵する絵画

等を写真と学芸員の解説で紹介してきました。(第6号～第50号)

●その他

●敦賀港開港百周年シリーズ

(文) 井上脩氏 第2号～4号)

●卷頭エッセイ

増永迪男氏(山岳エッセイスト)

「樹氷のブナ林」(第46号)

・田中完一氏(敦賀市文化協会会長)

「徳垂後裔」(第47号)

・今川裕代氏(ピアースト)

「音楽をするとこうしたこと」(第48号)

・吉田豊一氏(陶芸家)

「感性について」(第49号)

●財団主催の文化事業等を紹介

「げんでんふるさと文化賞」、「げ

んでん芸術新人賞」、「ふるさと大賞

写真コンテスト」など財団の顕彰事

業や、「福祉寄席」、「能・狂言を樂

しむ会」、「げんでんふれあいコン

サート」、「文化講演会」、「中学生の

海外派遣事業」など財団主催の文化

事業の模様を紹介してきました。

県内の文化施設等を紹介

●福井県かきぞめ競書大会、作品展

●財団助成事業

福井県立恐竜博物館、福井市立橋

韓國船遭難救護の碑(第26号)
中野重治(第27号)
則武二雄(第28号)
今川節(第29号)
多田裕計(第30号)
芳賀天一(第31号)
高浜虚子(第32号)
橋本進吉(第33号)
雨田光平(第34号)
藤原定(第35号)
開高健(第36号)
尾崎放哉(第37号)
山本周五郎(第38号)
深田久弥(第39号)
伊藤柏翠(第41・42号)
泉鏡花(第40号)
伊藤柏翠(第41・42号)
松木庄左衛門

等を訪問し、展示・活動内容等を紹介してきました。(第4号～第40号)

敦賀市立博物館誌上ギャラリー

敦賀市立博物館が所蔵する絵画

等を写真と学芸員の解説で紹介してきました。(第6号～第50号)

●その他

●敦賀港開港百周年シリーズ

(文) 井上脩氏 第2号～4号)

●卷頭エッセイ

増永迪男氏(山岳エッセイスト)

「樹氷のブナ林」(第46号)

・田中完一氏(敦賀市文化協会会長)

「徳垂後裔」(第47号)

・今川裕代氏(ピアースト)

「音楽をするとこうしたこと」(第48号)

・吉田豊一氏(陶芸家)

「感性について」(第49号)

●財団主催の文化事業等を紹介

「げんでんふるさと文化賞」、「げ

んでん芸術新人賞」、「ふるさと大賞

写真コンテスト」など財団の顕彰事

業や、「福祉寄席」、「能・狂言を樂

しむ会」、「げんでんふれあいコン

サート」、「文化講演会」、「中学生の

海外派遣事業」など財団主催の文化

事業の模様を紹介してきました。

ふるさと福井人物シリーズ

豊臣秀吉の近臣・敦賀城主

大谷吉継(二)

文/外岡慎一郎

筆者プロフィール



外岡 慎一郎
Shinichiro Tonocka

（筆者略歴）1954年生。神奈川県出身。中央大学大学院文学研究科（国史学）修了。元敦賀短期大学教授（1986/4～2013/3）。

現職：敦賀市立博物館長（2013/4～）。社会的活動（現職）：日本古文書学会理事、福井県文化財保護審議会委員、福井県立若狭歴史博物館協議会委員など。

- （おもな著書類（近年分））
- 武家権力と使節道行（単著）同成社 2015年
 - 街道の日本史 31・近江若狭と湖の道（分担執筆）吉川弘文館 2003年
 - わがさ美浜町誌・美浜の歴史 1 ふりかえる美浜（分担執筆）福井県美浜町 2010年
 - 大谷吉継のすべて（分担執筆）新人物往来社（現カドカワ）2012年
 - 大谷吉継と敦賀（敦賀論叢 15）2000年
 - 青蓮院坊官大谷家と大谷吉継（敦賀論叢 17）2002年
 - 天正地震と越前・若狭（敦賀論叢 26）2012年
 - 越前・若狭の歴史地図・津波（敦賀論叢 27）2013年
 - 安政東南海地震と敦賀（敦賀市立博物館研究紀要 28）2014年

医者はこちらで用意する

敦賀の古刹西福寺を再興し、のうちに中興上人と呼ばれることになる道残の後継として重い役を担つた良円。彼もやがて腹の病に冒されてしまつ。回復への展望が開けないなか、自分の後継ぎをどうするか、心配になつてきつた。そこで、敦賀城主大谷吉継に病状を伝え、善後を図る相談の手紙を書いた。これへの返事の手紙が西福寺にのこされている。紹介しよう。

【現代語訳】

お手紙拝見しました。去る十月頃より腹病に悩まされていて、今も快復の兆しがみえないとのことで、心配です。本復されることを信じていますが、命のあるうちに後継者を決めておきたいとのご意思、承りました。何よりあなたたの御遺言、こそが（吉継の）花押をすえた文書（任命状）になるわけですから、その点ご安心ください。くれぐれもご養生に専念してください。

（追伸）なお、その地（敦賀）で養生が困難であれば、こちらへお上りください。医者は用意します。

筆者が大谷吉継という人物に関心を持つきっかけは、実にこの書状にあつた。病気見舞いはともかく、敦賀での養生が思うようにならなければ、医者は用意するから上洛してこいという呼びかけは、西福寺住職との日常的な交流なくして考えにくい。さらには、前号で述べたように吉継は病とともに生きた。病に苦しむ他者への配慮は篤いものだったろう。初めてこの書状に接したとき、そんな想いが去来したのを記憶している。

西福寺には吉継の書状が、これを含めて四通のこされている。それぞれ、今でいえば中元・歳暮にあたる季節の届け物への礼状かたがた、再会を期したり、「太閤検地」で優遇措置が取られたことを祝う内容である。道川（どのかわ）、小宮山などの敦賀商人からのも、その点ご安心ください。くれぐれもご養生に専念してください。

今度の御企かなならず
停止有べき

慶長五（一六〇〇）年七月、大谷吉継は、会津の上杉景勝討伐に向かつた徳川家康を追つよつに敦賀を発ち、会



（年未詳）極（12）月25日付 大谷吉継書状
川舟兵三郎（道川）あて ナマコの札状
(道川文書 / 敦賀真願寺所蔵)

津へ向かっていた。ところが、美濃垂井に差し掛かると、そこに石田三成の使者があらわれ、三成の居城佐和山城（彦根市）に導かれる。そして、三成から家康打倒の兵を擧げる決意を伝えられる。

吉継は挙兵を無謀と吐き捨てる。三成の人望のなさ、家康とその与党の兵力（財力）の強大なることを再認識して挙兵を諦めるよう答えた。しかし、三成の決意の固いこと、そして秀吉死後の政権運営が家康主導の色を増すなかで、秀吉の遺言どおり秀頼への政権移譲が困難になっている現状を考慮し、吉継は三成とともに起つ。

佐和山での吉継と三成との会話は、関ヶ原合戦を題材とする軍記・合戦記類が競うように筆を躍らせるところであるが、逸る三成を止める吉継という基調は変わらない。密議の実在は疑えないとしても、会話の内容がどのようなものであつたか、今は知る由もない。江戸時代の福井藩主越前松平家の蒐書「松平文庫」に、幕末の藩主松平慶永（春嶽）が明治十二年（一八七九）年に写した「慶長見聞書」がのこる。関ヶ原合戦を描く軍記で、浅羽成儀（あざなりのり）著、慶安四（一六五二）



松平文庫
(福井県立図書館保管)

年の成立であることが奥書から判明する。

「今度の御企かならず停止有べき」とは、この「慶長見聞書」にみえる吉継のことばである。吉継は三成に言う。

「(三成は) 諸人から憎まれ、いよいよ腹を切らされるところまで追い込まれた時、私がいろいろ手を尽くして家康にとりなしを頼み、今まで生きてこれられたのだ。今また事を起こせば、去年(三成を襲撃し) 積年の恨みを晴らそうとした者たちは皆敵になる。(中略) 私が病身を押してはるばる会津まで下ろうとしているのも、ひたすら三成と家康が争つことがないよう取り計らうためだ」(現代語訳・筆者)と。

去年の三成襲撃事件とは、慶長四（一五九九）年閏二月、福島正則・黒田長政ら七人の武将による三成殺害計画をさす。家康が仲介に入り、三成の政権離脱（佐和山蟄居）を条件に、福島らの武力発動をとどめたのである。そし

て、吉継がこの家康の仲介に大きく関わったことと示す吉継の書状が、大阪城天守閣（博物館）にのこされている。

閏三月九日付で、この一件についての処置に感謝する内容。宛名を欠いているが家康あてであると考えられている。この手紙で吉継は、「ただちに参上して御札を申し上げるべきであるが、病身ゆえにかなわない」とも述べている。家康との間で使者を飛ばしながら、三成の助命に尽力した疲労が、安堵の思いに重なっていたとも想像される。

軍記類の叙述はみな創作として斥けられない理由がここにある。軍記作者たちは、今は逸失してみるとのできない史料もみていた可能性がある。



落穂集
(小浜市教育委員会提供)

一向の小身者にて

ることはあっても、それはかたちばかりのこと。心の底では我らを軽んじてゐる」(現代語訳・筆者)と。吉継の目認識が示されている。吉継は敦賀五万石、三成でも一九万石余に過ぎない。対する家康は二二五万石。家康臣の井伊直政十二万石、榎原康政十万石。吉継は井伊・榎原に及ばないものである。

秀吉側近として周囲の諸将も一目置く存在とされていたものの、秀吉亡きあとは、その権威を背に負うことでもきない。三成は何度か家康暗殺を企てる。しかし吉継はむしろ家康方に立って、事態の收拾に奔走した形跡がある。そして、吉継は三成が失脚するとの欠を埋めるよう家康主導の政権運営に参画していく。折しも宇喜多家・島津家に内紛が生じており、その仲裁に吉継も一定の役割を果たしたことなどが知られている。政権に身を置くことで、家康の真意を探る意図があつたとすれば、智将の名にふさわしい。

友山は吉継に関する記述について、大谷の親族である早水吐斎なる人物から聞書きをとつたと書いている。「落穂集」もまた、既存の軍記類を参照しながら、諸家の文書や関係者からの聞き取りをもとに著されたのである。

今のところ早水についての見当はついていない。ただ、福井藩士大谷助六家が吉継の子孫であるという先祖書を藩に提出している。また、江戸時代に青蓮院門跡（前号参照）の坊官進藤為善が編集した寺誌『華頂要略』収載の坊官大谷系図にも、福井藩士大谷助六家初代（重照）の名がある。究明の好機は意外に近くにあるかもしない。

ふくいの伝統行事

福井県無形民俗文化財

「国津神社の神事」

若狭町

向笠の歴史

若狭町向笠は、鳥浜貝塚から西南へ3キロばかり入った高瀬川の上流に所在する、のどかな農村。郷土史家の故・中西竹次氏の『向笠沿革史』によれば、当地は日向の國の吾田邑から神武天皇の役人が移住して開拓。その後河内國の大神宮の神官（六人百姓）が崇神天皇の勅命によって諸國を巡回し、崇神天皇庚寅3月17日に当地に入村し定住。「笠に向かって移住したので『向笠』の地名になったと言われています。あくまでも伝承なので詳細は不明ですが、文永二年（1265）の『若狭国惣田数帳写』には「向笠庄四十三丁四反四十八歩」と記され、「地頭得宗御領処御家人伝領地」「大神宮御厨」とあります。

神が降臨するオハケ

神事講の成立

国津神社の例祭は毎年4月3日。「越の村」「矢武勇」「大村」「田樂」と呼ばれる一組三十戸の四組の神事講によって祭事が當まれ、「越の村」は野

香として伝承の史実はわかりませんが、當地の開拓者が日向の國から移住したことは、享保五年（1720）の神名帳写しに見える、正五位忍穂耳命（にぎのみこと）瓊瓈杵尊が国津神社の主な祭神として祀られていることからも裏付けられます。別当寺は真言宗月輪寺。「若州管内社寺由緒記」（1675）には国津大明神・弓矢八幡・山神・牛頭天王の「右四社口來の氏神にて御座候田口緒不知」とあり、その後慶長年間に倉見から天満宮が勧請されており、國津神事はもともと当地に付随した神事とも言われています。



行列を平伏して迎える



神輿・王の舞などの巡行

この他に、神事の分担としては、露払い・老司・鉾持・王の舞・獅子舞・かぶり・神輿・警固・幣差し御供昇き（人身御供）・御供昇きづれ・酒たたき・大御幣持ち・囃し太鼓・ササラ・オハケ持ち・料理人・家内などが、午前1時半頃より当屋（現在は集落センター）から村立ちをし、巡幸の際には当番たちが道端で平伏しておごそかに

祭祀は終了となります。昨年（平成27年）はあいにく午後から雨が降り、残念ながら王の舞のみの奉納となりましたが、田植えの舞の囃し言葉の「ワンナントナ」三つ葉も咲いたら四つ葉も咲こよ四つともなれこそとの村咲こよおしきゆ



雅やかなお供えも見もの

牛を狩りだす舞（王の舞）、「矢武勇」は出てきた野牛を矢で討ち取る舞（中止）、「大村」は田植えの仕種、「田樂」は豊作祈願の舞とされています。各講組には三人の当屋があり、宿を務める主当屋を「亭主」、神事を管掌する役を「天神」といい、年長順に「一の天神」「二の天神」を担当。御幣は四十八本、神様が降臨される際の依り代となる才ハケ六本ほか、各種の特殊神饌を用意し、前日の二日早朝に当役が世久見の浜で垢離かきをして祭礼に臨みます。

牛を狩りだす舞（王の舞）、「矢武勇」は出てきた野牛を矢で討ち取る舞（中止）、「大村」は田植えの仕種、「田樂」は豊作祈願の舞とされています。各講組には三人の当屋があり、宿を務める主当屋を「亭主」、神事を管掌する役を「天神」といい、年長順に「一の天神」「二の天神」を担当。御幣は四十八本、神様が降臨される際の依り代となる才ハケ六本ほか、各種の特殊神饌を用意し、前日の二日早朝に当役が世久見の浜で垢離かきをして祭礼に臨みます。

この他に、神事の分担としては、露払い・老司・鉾持・王の舞・獅子舞・かぶり・神輿・警固・幣差し御供昇き（人身御供）・御供昇きづれ・酒たたき・大御幣持ち・囃し太鼓・ササラ・オハケ持ち・料理人・家内などが、午前1時半頃より当屋（現在は集落センター）から村立ちをし、巡幸の際には当番たちが道端で平伏しておごそかに

祭祀は終了となります。昨年（平成27年）はあいにく午後から雨が降り、残念ながら王の舞のみの奉納となりましたが、田植えの舞の囃し言葉の「ワンナントナ」三つ葉も咲いたら四つ葉も咲こよ四つともなれこそとの村咲こよおしきゆ



境内で王の舞を奉納する

若狭の行事とシトギ(粢)

若狭の行事とシトギ(粢)

日本人は、特別な日に餅を作り、神仏に供え食してきました。今でも、正月の鏡餅やモチバナ、五月の節句は柏餅、彼岸にはボタモチなど、節目の日に様々な種類の餅が食べられています。こうした餅の一種に、シトギと呼ばれる、古い時代から供物に用いられてきた餅があります。作り方は、水に漬けておいた生の米を漬したり、擂り潰したりして粉にし、水や酒などで練つて餅や団子状にします。

若狭では、シロモチやタガネ、スリモチなどと呼ばれ、二ソの杜や山の口などの行事に用いる地域があります。今回は、このシトギについて紹介します。

二ソの杜とシロモチ

おおい町大島半島では、開拓した先祖を祀る祭祀が、一月二日から三日の早朝にかけて行われています。地区内には、二ソの杜が三〇数ヶ所点在していますが、今ではお祀りされていない杜も多くなっています。

各社や同じ杜でも祭祀の当番によつて多少、供物の内容は異なりますが、赤飯のおにぎりとシロモチ(タガネと二ソ)が供えられています。かつては、二ソ田と呼ばれる田があり、そこで供



瓜生の杜

物の材料となる米を作っていました。瓜生の杜では、赤飯のおにぎりの上にシロモチをのせ、藁びとに入れて供えます(二〇一二年調査)。かつては、石臼で米をすりシロモチを作っていたそうですが、今は、米粉などを購入し、湯で練つて作ります。

杜には一人でまいってはいけないと伝えられ、年に一度、一月二日に当番の家の二人がおまいりし、供物を供え手を合わせます。

山の口とシロモチ

小浜市内では、山の神を祀る山の口(講)で、シロモチを供える地域があります(二〇一三・一四年調査)。黒駒区と法海区では、二月九日と二月九日に山の口が行われています。これらの地では、臼と杵を用いて、前日から水に漬けておいた糯米を、漬して粉にし、酒を混せて丸く厚みのあるシロモチを作り、山の神に供えます。

お供えしたシロモチは、山の神をまといり終えた後、各家に持ち帰り、外が飴色になるまで焼いて食べます。

また、二月の上旬に行われる西相生区奥窪谷の山の口講では、粳米をシリモチと呼ぶ餅と鏡餅などが供えられます。シリモチは食べませんが、



瓜生の杜の供物



黒駒区の山の口

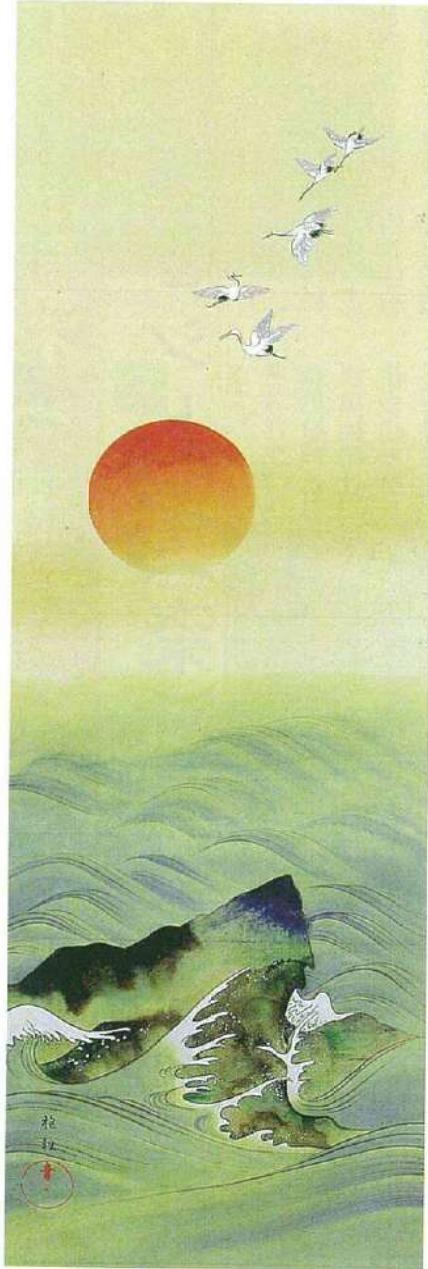
各家の数が用意され配られます。こうした山の口の行事は、女性が携わらない決まりになっています。このため、シロモチやシリモチは当番の男性たちが、酒や水の量を慎重に加減しながら作ります。

若狭には多くの素晴らしい行事がありますが、シロモチは、古い時代の文化を今に伝えており、大変重要な徴的な供物です。

さらに、餅の場合は、丸餅、角餅、鏡餅など形が決まっていますが、シロモチの場合、水加減で形を自由に変えることができるため、各地域で様々な形状が見られ興味深い食です。

旭照波図、春富士図、秋波図 三幅

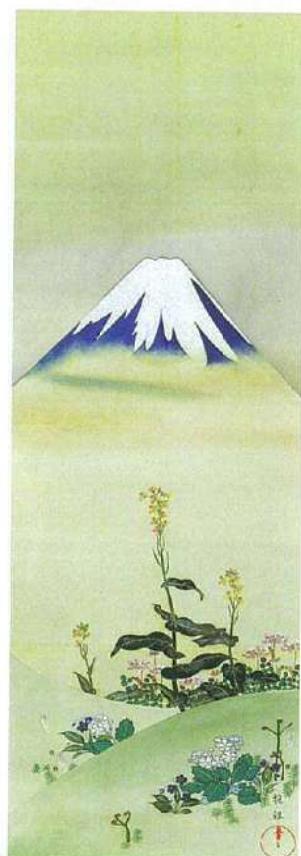
酒井抱祝筆



旭照波図（中幅）



春富士図（右幅）



秋波図（左幅）

琳派とは、直接的な師弟関係のない流派で、私淑（その者を慕い学ぶこと）によって時を超えて継承されました。元禄期の京都にて、

本作の中幅は、岩にうちつける波に旭日の図で、空には丹頂鶴が舞っています。右幅は遠景に富士山、近景には春の草花（あぶらな、げんば、さくら草、杉菜、ぜんまいなど）が咲いており、左幅にも、

山容に秋の草花（ススキ、萩、菊、藤袴、女郎花、つゆ草など）が描かれています。縁起の良い旭日と鶴を表した中幅と、春秋の草花が咲く右幅・左幅の三幅で構成されており、吉祥モチーフと春秋花卉とを装飾的に描き上げた、琳派らしい作品となっています。

（続）

は様式化され、すべるよう滑らかです。また、琳派の特色である「たらしこみ」技法を用いて、岩石や可憐な草花を描き上げています。自然の彩りの美しさを豊かに表現した作品です。

作者の酒井抱祝は、唯一と号し、抱祝、狗禪の別号があります。明治（1878）年生、没年不詳。

<input type="checkbox"/> 絹本着色
<input type="checkbox"/> 縦118.7cm 横41.0cm
<input type="checkbox"/> 近・現代（明治～昭和）
<input type="checkbox"/> 落款 抱祝
<input type="checkbox"/> 印章 「青々」朱文印

（敦賀市立博物館 学芸員）

加藤敦子

俵屋宗達に私淑した尾形光琳から始まり、そこから1世紀ほどの時を経て、酒井抱一による江戸琳派へと繋がりました。平面的で装飾性豊かな光琳の作風と、「写生画」で活躍した円山応挙の画風とを融合させた抱一は、琳派の絵画表現に新たな展開をもたらしました。そして、抱一の門下によつて江戸琳派は繼承されます。本図の作者、酒井抱祝は、抱一の弟子・鈴木其一に師事した酒井道一の子として誕生し、明治から昭和の時代にかけて琳派の画風を伝えました。

本作を見てみると、中幅の波の飛沫は様式化され、すべるよう滑らかです。また、琳派の特色である「たらしこみ」技法を用いて、岩石や可憐な草花を描き上げています。自然の彩りの美しさを豊かに表現した作品です。

情報ファイル

文化講演会「ことばのビタミン」

講師 村上信夫氏（元NHKエグゼクティブアナウンサー）



講演の村上さん

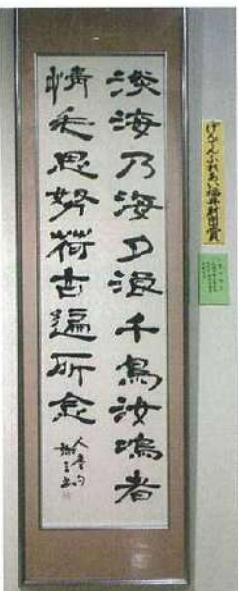
- 講師の村上信夫さんは、大学時代、中西龍さん（元NHKアナウンサー）の「嬉しいことを倍に、哀しいことを半分にするのがアナウンサーの仕事」との言葉に感銘を受け、アナウンサーの道に進めたそうです。「嬉しい言葉の種まき」が天の声と感じ、58歳でNHKを退局、全国を回り講演活動を行つておられます。
- 「なにげない言葉の中にかけがえのないことがある。言葉は使い方次第で「武器」になるが、「楽器」にも変わる。意識しないと嬉しい言葉にならない。嬉しい言葉を使えば人生が変わる」「ありがとう」「いただきます」「おかげさま」「よかつた」「だいじょうぶ」「だいすき」など、口にすることでき人生が変わる。

（講演のお話の中から）

第45回若越書道会展



展覧会の模様



黒田さんの作品

◎げんでんふれあい福井財団賞
黒田弥三さん（越前市）

平成27年12月18日（金）から20日（日）まで、第45回若越書道会展が福井県立美術館で開催されました。591点の応募があり、厳正、慎重な審査を経て、90名の入賞者が決定。会員の部の大賞には山内佳芳里さん、五十嵐豊子さん、田村瑠仙さんが、一般公募の部の県知事賞には寺尾とよ子さんが選ばれました。12月20日（日）に同美術館で表彰式が行われ、当財団からも、「げんでんふれあい福井財団賞」を授与しました。

● 第50号を記念して、福井県立若狭歴史博物館副館長の垣東敏博様に寄稿をお願いしました。本県の民俗文化に造詣が深く、民俗芸能等の保存、継承に尽力されておられます。お忙しい中、ありがとうございました。

● 「食」とともに「祭」も本県が自慢できる宝です。「祭」「神事」など世界に誇れる伝統ある民俗芸能、行事等がたくさんあります。県内外の多くの人にもつともつと見ていただき、感動していただきたいと思います。春祭りのシーズンを迎える。表紙の「国津神社の神事」は、若狭町向笠地区で毎年4月3日に行われます。古式ゆかしい神事で悠久のロマンを感じます。ぜひお出かけください。

● 当財団は本県の文化の振興を事業の柱のひとつとしており、本誌も県内の伝統文化にスポットをあててきました。編集に当たっては、若狭路文化研究会の金田久璋会長をはじめ会員の皆さん、県内の文化団体の皆様など多くの方々に大変お世話になりました。改めてお礼申し上げます。

● 休刊は寂しい限りですが、遠からず再刊の日が来ることを念じつつ……。ご愛読ありがとうございます。



財団ふれあい通信

平成28年度 財団助成事業の募集について

財団では、平成28年度において文化活動等の事業を行うため助成を受けたい団体を募集しています。

対象団体の要件

- 1 福井県内に活動の本拠を置く団体
- 2 構成員（会員）が原則として20名以上の団体
- 3 平成28年4月現在で、原則として設立後2年を経過している団体
- 4 営利を目的とせず、明確な会計処理を実施、報告できる団体
- 5 特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

応募方法

- 財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を当財団に提出してください。

申請期間：平成28年2月21日（日）～平成28年3月20日（日）まで

- 申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等があります。詳しいことは「げんでんふれあい福井財団（☎ 0770-21-0291）」にお問合せください。

財団イベント INFORMATION

イベント名	内 容	期 日	場 所	入場料・その他
文化講演会	<講師> にしゃんた氏 <演題> 「～多文化共生と「新」時代～ 違いを楽しみ、力にかえる」	平成28年 2月7日(日) 午後1時～	小浜市文化会館	小浜市連合婦人会と 財団の共催 入場無料
～今川裕代トリトル ピアニストが贈る～ フランスの風を運ぶ アフタヌーンコンサート	今川 裕代	平成28年 3月13日(日) 午後3時～	若狭町 パレア若狭 音楽ホール	パレア若狭主催 財団協賛 (全席指定) 一般 1,500円 学生 500円
平成27年度 福井県新人演奏会	オーディション (公開)	平成28年 2月21日(日) 午前10時～(予定)	ハーモニーホール ふくい 小ホール	福井県文化振興事業 団主催 財団協賛 <オーディション> 入場無料
	マスタークラス (公開)	平成28年 2月22日(月) 午前10時～(予定)	ハーモニーホール ふくい 全館	<マスタークラス> 聴講料 500円
	新人演奏会	平成28年 3月20日(日) 午後2時～(予定)	ハーモニーホール ふくい 小ホール	<新人演奏会> 全席自由 500円